

平成 17 年 1 月 13 日、麴町会館で、富士山麓ファルマバレー構想の一翼を担う、静岡県立静岡がんセンター（以下がんセンターと略称する）の研究プロジェクト説明会が行われた。聴講申し込みが殺到し、立ち見（立ち聴き？）も出る盛況ぶりである。この ファルマバレー構想については、ホームページなど各方面で公開されているので、ここでは省かせていただくことにする。

まず、がんセンター及び研究所の双方を統括する山口総長が演壇に立ち、研究プロジェクトの概要が述べられた。

平成 18 年開設予定の研究所は、がんセンターと顔をつき合わずのように近接して建設中であるが、研究組織はいち早く立ち上がり、既にごんセンター内で活動を開始している。広い敷地にわざわざ寄り添うように建てられているのは、「医療現場と研究との間を分かたず、研究員は医療現場を知れ、現場の医師は最先端研究の動向を知れ」という総長の理念の現れであろうか。

さて、この説明会の中で、特に印象的だった内容を以下簡単にご説明したい。がん治療の先端治療の 1 つに 陽子線治療がある。ドイツ、アメリカ、ロシアで今後治療施設の建設が予定されている。世界でもまだ殆ど設備されていない、先端治療施設である。

従来の放射線治療と違い、一度にいくつものビームを腫瘍に向けて照射する。しかも、ビームが放射線のように身体を貫通せず腫瘍の部位で止まるため、健康な細胞が影響をうける心配がない。レーザーの本数が多い（1 回線量増加）ということは、照射時間や回数が短縮される（低分割照射）。どういうことか、お判りでしょうか？固定具の装着などに数十分の時間はかかっても、驚くなかれ 照射時間はたったの 1 分程度（！）というのである。

さらには、陽子線治療は、外来通院が中心であるという。在宅で寝たきりの中の通院治療ではない。患者さんは、「社会活動を継続している」、つまり、普通に会社で働き、日常生活しながら、定期的に通院し治療を受け、また帰宅する、ということである。世界中を探してみても、このような 陽子線治療施設を備えている国は殆どない中で、我が国では、医療政策の後押しを受け 1979 年には放医研が重子線治療施設を整備し、いち早く治療研究を開始している。その後も筑波大学陽子線医療利用研究センター、国立がんセンター東病院 等、いくつもの医療研究施設が陽子線治療研究に既に取り組んでいる。日本の放射線治療技術は世界レベルであるという。当然、設立が一番若い静岡がんセンターの陽子線治療施設は、世界レベルである。

「できるだけ患者の負担が少ない治療手法を開発する」、「放射線のメス…ビームをメスのように操り 腫瘍を撃退する」数十年前には夢でしかなかった治療法のいくつかが、多くの臨床医と研究者によって少しずつ患者の側へ近づいてきたようだ。今後、経験を積んだ医師が増え、日々の実施件数が増え、事後検証に足だけの EBM が得られれば、陽子線治療が保険承認を受ける時代がくるはずである。「患者・家族を徹底支援し」、「がんを上手に治す」は、静岡がんセンターの基本理念である。